アメリカ旧南部における非奴隷所有農民（上）

——第二次アメリカ革命の構造把握のために——

山本幹雄

〔要約〕アメリカ資本主義の全面的な発展の道をきりひらいた「第二次アメリカ革命」は、南北、両地域社会の抗争をめぐる広汎な社会戦争であつた。したがつて、その「地域性」の解明こそは革命の構造把握にとつて不可欠の前提となる。この意味で、資本主義高潮期にもかかわらず、奴隷制社会たる旧南部が、ながく「頑固な南部」を形成しえたのはなぜかという問題は、われわれの興味をひく。この場合、旧南部の「地域性」の形成をば、社会構成的諸関係から析出することが重要課題となるであろう。旧南部社会の圧倒的多数を占める非奴隷所有農民の分析をこころみたこの小論は右のような意図をふまえたものにほかならない。

一　問題の提起
二　分　析
　(一)　若干の数量的考察（以上本号）
　(二)　Yeoman
　(三)　One horse farmer
　(四)　Poor white
三　展　望

一　問題の提起

基本的な問題から出発しよう。——C・A・ビーアドは南北戦争の本質をほぼ正確によみとつて次のように書いている。

> 南北戦争は、「階級構成、富の蓄積と分布、産業発展の過程、および建国の父達からうけついだ憲法における広汎な変革をまきおこす」「社会戦争」であり、「北部と西部の資本家、労働者、農民が、南部の農園貴族をば国民政府の権力の座から追放した社会的大変革であつた。」だから、「所謂南北戦争はまことに第二次アメリカ革命」とせられなければならないと。①

一方、ヨーロッパにおける同時代人マルクスは、アメリ

カにおける南北の武力闘争が展開されたとき、「運動全体の基礎は過去も現在も奴隷問題にある」として、いちはやく次のような見解を発表した。

「南部と北部とのあいだの現在の闘争は、それゆえ、二つの社会制度のあいだの、奴隷制度と自由労働制度とのあいだの闘争にほかならない。この二つの制度が北アメリカ大陸にもはや平和的に併存できないので、この闘争がおこつたのである。この闘争は、いずれか一方の制度が勝つてはじめて、おわらせることができるのだ」[2]と。

ここでマルクスが指摘しようとしたのは、南北戦争の担つている革命性の本質が、奴隷制度と自由労働制度との対決に求められねばならず、このことの中に世界史的意義が存在するということであつた。

「十八世紀のアメリカの独立戦争がヨーロッパの中間階級に対して警鐘をうちならしたように、十九世紀のアメリカの南北戦争は、ヨーロッパの労働階級に対して警鐘をうち鳴らした」[3]。

たしかに「北アメリカの内戦」は、自由労働制度と奴隷制度との対決をめぐる広汎な《social conflict》として、ビーアード＝マルクス的な認識によつて正しく把握されなければならない。

ところで《social conflict》とはいいながら、近代ブルジョワ革命の系列の上で、南北戦争ほど特異なかたちをとつて遂行された革命はないし、その特異性が、革命そのものの本質とこれほどふかくかみあわさつていた例もめづらしい。一つの近代国家における二つの社会、前近代的南部と近代的北部というはつきりした《section》「地域」の抗争。すなわち《sectionality》「地域性」の強さがその特異性をいろどるものにほかならなかつた。

したがつて、第二次アメリカ革命の構造把握は基本的には奴隷制をめぐる《social conflict》という形でなされねばならないにしても、その直接的な手がかりはあくまでも「地域」の中にもとめられなければならないであろう。

革命のありかたを「地域」からみきわめようとする場合、世界的な資本主義の高潮期にありながら、なお頑強に、前資本主義的な奴隷制を堅持しつづけた旧南部の「地域性」がまづ問題となる。事実、旧南部は《solid south》「頑固な南部」とよばれる強い統一性を保つた「地域」であつた。そのため、たとえば、議会主義、プロパガンダ、漸進的アボリショニズム等の手段に訴えようとした反奴隷勢力の試

みはほとんど完全に骨抜きにされてしまい、ついには、第二次アメリカ革命の暴力性をばみちびきだしたのである。第二次アメリカ革命の構造は、たによりも、このような旧南部の「地域性」を究明することなしに論じることは出来ない。

しかしながら「地域性」の解明はさして簡単なものとは考えられない。というのは、旧南部は、一方で英国産業資本に寄生し、そのためにアメリカにおける資本主義の展開を強力にはばみつづけた奴隷制社会であり、この意味で、南北両「地域」の対抗は、あくまでも《economic section》のそれとして把握されねばならず、したがつて、「地域性」の分析も、結局、資本主義発展のメカニズムにかかわりあいながら、いわば全機構的になされなければならないからである。これは、かなり困難な課題である。

しかし、「地域性」の問題が、まづ《economic section》の問題として、いわば巨視的に分析さるべきものであるにしても、それだけで充分とはいえない。それは旧南部社会そのものについての、社会構成的内在的な諸関係の分析によつてより明かにされねばならない性質のものである。というのは、旧南部が一つの《economic section》としてとりあげられたとしても、それはあくまで北部との対抗関係において考えられることであつて、強固な「地域性」そのものの形成を積極的に説明することにはならないからである。したがつて、旧南部の強固な「地域性」を解明しようとするとき、そこに内在する社会構成的な諸関係の分析がとくに重要な課題となるであろう。[4]

「頑固な南部（ソリッド・サウス）」をこのような立場で究明するには、若干の予備作業が必要となる。

一般に、《Cotton Kingdom》における巨大な綿花生産の単位は、いわゆる《plantation》であつたが、その存在をささえた歴史的諸条件は、以下にみる如く、かなり複雑なものであり、しかも、それらの諸条件は、そのまま旧南部社会の基本的な性格を規定していた。すなわち、

「プランテイションとは、《staple crop》=商品作物の生産において非常な数の不自由労働者が統一された監督と支配の下に雇傭される資本主義的な型の農業組織である。[5]」それは「通常、植民地又は半植民地における大土地所有の一つの型であつて…綿、砂糖、ゴム、コーヒ、茶、米、パイナプル、バナナの如き熱帯、亜熱帯産物を栽培する。[6]」したがつて、このことの純粋に経済的な意味

合は、「プランテイションは明かに大規模生産と富の蓄積のために組織される。一般に他には何らの目的ももたない。プランターはプランテイションをば社会的政治的機構と考えているのではなく単に金儲けのからくりと考えている。」[15] ということになる。しかしそれにもかかわらず、「プランテイションおよびプランテイション社会においては、プランテイションのオーナーと高級管理者（とくに白人）に代表される上層階級と労働者階級の間に鋭い分裂が存在する。上層階級と下層階級の間の分裂の線が、少くとも経済的であると同時に一部分人種的なものであるため、それははっきりと固定されるに至り、個人は一つの階級から他の階級へ移行することは殆んどない。この分裂は生活、経済、社会、政治の凡ての局面をおおつている」[16]。

プランテイション、およびプランテイション社会における、これらの諸特徴――資本主義、不自由労働、階級分裂、亜熱帯――ひと口にいつて「半植民地」が旧南部社会の一般的性格であつたとしてさしつかえない。

しかしながらとくに旧南部の場合、問題はこれだけでおわらない。第一に、

「もともと、プランテイションは、労働力をば、自由、又は白人年期労働に依存したが、その存続と拡大はネグロ奴隷によって可能となったのであり、ネグロ奴隷制なしには、プランテイションは有利な気候条件にもかかわらず発展しえなかったであろう」[17]。

旧南部においては、《Plantation》が《Negro Slavery》と完全に癒着することによつて、たとえば、小数の支配的プランターと、圧倒的多数の下層白人との間にネグロ奴隷の集団を介在せしめたことは注目されてよい。

しかし、第二に旧南部のプランテイション経済は、次のような独自の、きびしい法則をもつており、それが旧南部社会の諸相を一層特徴的に規定していたのである。すなわち、

「奴隷によつておこなわれる南部の輸出品――綿花、煙草、砂糖その他――の栽培は、奴隷の大集団によつて、大規模に、そして、簡単な労働だけしか必要としないような自然的に肥沃な広大な土地でおこなわれるかぎりでだけひきあうのである。土地の肥沃性よりも、むしろ資本の投下、労働の知力および活動力に依存する集約的耕作は、奴隷制の本質とあいいれない。」[17]

ここにみられるプランテイションの基本法則――粗放性と拡大性――は、いわゆる「西進運動」を通して、そのまま旧南部における階級的収奪につらなつている。すなわち、

「ユニオンの農庫、ミシシッピー河谷の綿花栽培地域は、年々、小さな農民の手からうばいとられ、大資本家に手渡されつつある。……凡ての偉大な綿作地は、まづ少しの生活手段と非常なエネルギーをもつ精力的な定着民によつて開拓された。彼等の開拓がお

わり、その家産が快適になり始めるや否や、大プランターが、その星人群をひきつれて東からやつてきて、その地に定着し、凡てのものを吸集し、蹂躙するのである。これが正にルイジァナとミシシピーの雄大な土地の上で、日々進行しつゝある過程なのである。小農民、いいかえると白人人口の大集団は急速に消失しつつある。あの栄光の河谷の豊かな河底地帯は大プランターの手に集中されつつあるのだ」[8]。

このような《plantation》経済の拡大性と、それにともなうきびしい階級的收奪過程から、相互に不可分にむすびあつている経済的ならびに政治的な問題が、旧南部に独自なものとしてたちあらわれる。

それは、「奴隷制をそのふるい領域内に厳密におしこめるならば、奴隷制が、経済法則によつて、しだいに消滅するようになり、また政治の分野では、奴隷州が上院をつうじて行使するヘゲモニーが絶滅され、そしてついには奴隷所有寡頭支配階級が自己の州内における『まずしい白人（プア・ホワイト）』のがわからの脅威的な危険にさらされることは必至であつた」[9]という問題である。

たしかに、このことの中に、奴隷制社会としての南部の存亡が賭けられていたのである。この問題をどうさばくかということが寡頭支配階級のたえざる運命的な課題にほかならなかつた。

しかし、この課題の解決のためには、課題そのものが教えているように、たえず奴隷制領域を強引に拡大しつづけてゆくよりほかに基本的な方法はない。したがつて、それは究極的には次のような政治的デマゴギーの形に要約される。すなわち、

「連邦の南部の奴隷所有者の数は三十万以上にはたつせず、これは少数の寡頭支配階級で、数百万のいわゆるまずしい白人（プア・ホワイト）と対立しているが、このまずしい白人の数は土地所有の集中によつてたえず増加したのであつて、彼等の状態にくらべられるものは、ローマの没落直前期のローマ平民（プレブス）だけである。あたらしい準州の獲得と獲得の見とおし、ならびに海賊的遠征によつてのみ、これらの「まずしい白人」の利益を奴隷所有者のそれと一致させ、彼らの何かやろうとするあれくるつた欲望「反奴隷主的階級闘争」に無害な方向をあたえ、そしていつかは、自分達も奴隷所有者になれるという希望をもたせて彼等を懐柔すること。」[9]がそれである。

したがつて、ここにのべられている寡頭支配階級のデマゴギーと、それに対する数百万の下積み階級の対応、一口にいつて、そのデマゴギーの可能性の範囲が、旧南部社会の単位としての統一性《sectionality》と、その強固さをはかる指標となると考えてさしつかえないであろう。

とすれば、旧南部の「地域性」をば、社会構成的内在的

諸関係からとこうとする試みは、数百万の下積階級のありかた、およびそれと《régime》そのものとのかかわりかたを分析することに求められなければならない。

我々は、「第二次アメリカ革命」の構造把握のための手がかりとして、顕著な「地域性」を指摘して、とりわけ「頑固な南部」への注目を促した。しかもその「地域性」は〔単なる地理的認識の次元をこえて〕、《economic section》として考えられるべきであるとともに、同時に、社会構成的諸関係においても考察さるべきことをのべた。そして、若干の予備作業を行うことによつて、今やこの問題が、半植民地における寡頭支配階級と数百万の下積み階級との対応、もつと直接的には、数百万のまづしい白人の社会的、階級的シテュエイションの分析に還元されねばならないことを知つたわけである。《Solid South》という強固な「地域性」の形成が数百万のまずしい白人達の動向にかけられていたことは間違いない。

さて、一八五〇年のセンサスその他の計算によれば、南部諸州の総人口約九四〇万人のうち、白人人口は約六二〇万人となつている。このうち、奴隷所有者、および奴隷雇傭者の合計は三四万七千余人、奴隷監督人、その他直接奴隷制とつながつていた人々を合わせても、高々四〇万人程度であつた。したがつて、〔これらの家族成員を平均五人とみれば〕奴隷所有および奴隷制から直接利益をうけていた人々の最大数は約二〇〇万人程度となり、南部人口の残り約七〇％が、奴隷制とは直接関係のない集団となるわけである。[10] ところで、一八五〇年のセンサスの職業構成表によると、〔十五歳以上の白人の〕農業、および類似の戸外労働者は、合計約百二万人となつている。したがつて、〔奴隷制に直接つながりのある集団との重複、十五歳以上という算定規準を勘案してひかえ目にみても〕、非奴隷所有者集団の九〇％以上、約四百万人が農業およびそれに類似の職業に従事していたことがわかる。[11] 旧南部における数百万のまずしい白人が非奴隷所有農民（ノン・スレイヴホルダー）を主体とするものであつたことはこれで明かである。だから、旧南部の下積階級の問題は、つづまるところ、これら数百万の非奴隷所有農民（ノン・スレイヴホルダー）の問題と考えて差支えないということになる。

しかし、そうとすれば、このさいさらに彼等の一般的、

社会的シテュエイションについて簡単に知つておく必要がある。一八五〇年における奴隷州の〔総面積約五億四千五百万エーカーから、政府公有地四千万エーカーを除いた〕私有地約五億五百万エーカーのうち、奴隷所有者三四万七千人は、一億七千三百万エーカーの肥沃な土地を占有し、約百万の非奴隷所有農民（ノン・スレイヴホルダー）は残り三億三千二百万エーカーの土地を分割しあつていたのである。[12] だからこの状態から、たとえば、次のような結果が出てくる。

「南部白人の三分の二は奴隷制と何の関係もなく、社会的生産の分配の非常に小部分だけを受けとつたのである。一千家族が一年に五千万ドル以上をうけとつたのに、一方、残余の六六万六千家族は僅かに六千万ドルをうけ取つたにすぎない」。[13] これは、そのまま社会的な力関係に表現せられる。「南部の非奴隷所有白人は全白人人口の約七割をしめながら……南部の権利、その誤謬、その政策、その利益、その制度が語られるときには、関心はいつも三四万七千人の権利と、誤謬と政策と、利益と、制度に向けられるのである。」[14]

アメリカ旧南部の「地域性」が問題となり、それをとく一つの鍵が、非奴隷所有農民（ノン・スレイヴホルダー）の階級的、内在的諸関係にもとめられ、しかも、一般的に彼等が右のような力関係におかれているとすれば、そこから、具体的な分析の方向がおのづから決定される。すなわち、「奴隷をもたない、奴隷所有から何の利益もうけない、奴隷所有社会の場所からしめだされている人々が、ほとんど問題たく、奴隷所有者のリーダーシップをうけいれ、奴隷制によつて生産された余剰に対して、自らのため、子孫のために、ほとんど何の要求もしなかつた。」[15] のは、なぜかということである。したがつて、以下に主題としてとりあげる非奴隷所有農民（ノン・スレイヴホルダー）の分析は、社会構成的諸関係からする「地域性」解明の問題とかかわりあつて、大まかに右のような立場をふまえている。

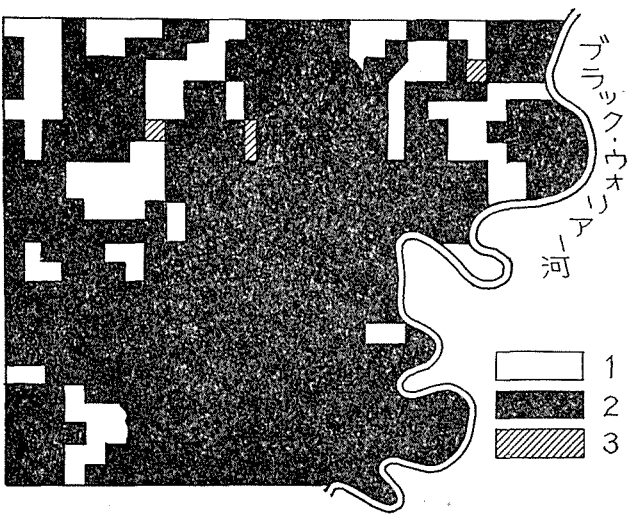
二　分　析

(一)　若干の数量的考察

旧南部の関係地図をひらいてみればわかるように、[16] アレガニー山系の外側、ヴァージニアからテキサスまで、50％以上の奴隷人口をもつ《black belt》が延々と続いており、一方、アレガニー山系およびその内側からミズーリにかけては、奴隷人口の稀薄な《border states》境界諸州が横たわつている。したがつて、一口に旧南部といつても、その

社会的諸相については可成りの地域差があるわけで、社会全体についての完全な概括ははなはだ困難となる。しかし、たとえば「地域性」の解明をめぐる分析等については、これらの困難が何らかの形で克服されない限り充分な成果をあげることはできない。このような意味で有益なのは、《sampling method》にもとづく各種統計資料の利用である。ヴァングービルト大学のオーズレー教授とその一派は、豊富な統計学的データーを南部史研究に導入することによつて注目をあつめているが、それらはこの分析においても利用さるべきである。[17]

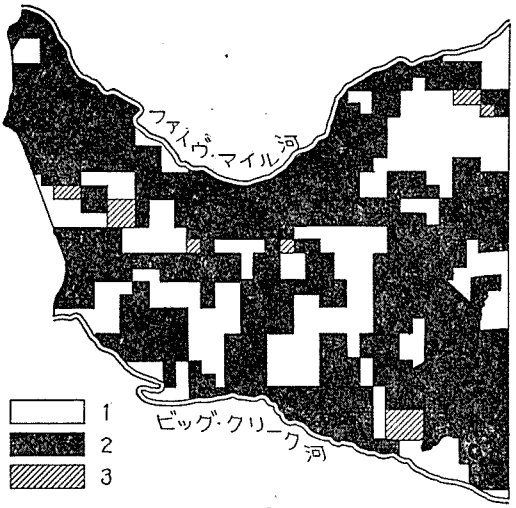
まづ、州の構成単位である《county》郡や、《precinct》選挙区、《parish》教区における土地所有関係を観察してみよう。第一図[18]は、アラバマ州の《Knoxville precinct》における奴隷所有者および非奴隷所有者の所有地分布図であり、第二図[18]は同州《Five Mile precinct》のそれである。前者は奴隷人口が全人口の50%をしめる代表的なプランテイション地区であり、後者は同様の比率が旧南部の総平均に近い20%前後の地区であるが、この両地区を通じて大まかにいいうることは、奴隷所有者と非奴隷所有者の所有地が、プランテイションおよび農場の大小にかかわらず殆んど無差別に入りまじつて分布していたということである。この点に関して今少し詳細に検討すると次のようになる。第一表[19]は典型的な《border states》の《county》、第二表[19]



第1図 非奴隷所有者，奴隷所有者の所有地分布
(アラバマ州 Knoxville precinct, 1860年)
1. 非奴隷所有者所有地 2. 奴隷所有者所有地 3. 公有地

第一表
奴隷および耕地所有
（テネシー州 Robertson county 1850年）

戸主名	奴隷（人）	地耕（エーカー）
M. Lowe	8	200
C. Keeler（水車大工）	0	50
A. Lowe	8	150
W. E. Felts（鍛冶屋）	0	50
W. Dowlin	1	50
H. Dowlin	11	70
J. McCormick	0	50
J. B. Fiser	29	400
B. W. Bradley	5	250
L. Harris（借地農）	4	40
J. C. Balthrop	3	60
W. H. Farmer	0	60
J. Head	0	40
M. Woodruff	1	75
J. Gower	0	20
J. Bell	6	100
J. O. Whited	0	60
G. Head	0	60
D. Alley	0	40
J. Winters	0	75
W. H. Head	0	40
J. J. Wilson	12	100
J. Elliot	4	35
T. B. Williams	6	60
G. W. Farmer	0	30
M. W. Winters（借地農）	0	77



第2図
非奴隷所有者・奴隷所有者の所有地分布
（アラバマ州 Five Mile precinct, 1860年）
1. 非奴隷所有者所有地　2. 奴隷所有者所有地
3. 公有地

は南部で最も豊穣をうたわれた《black belt》の《county》に関するもので、第一図と第二図の如き図表を数字的具体的に書き改めたものとみてよい。この両者から、いいうることは、奴隷所有者と非奴隷所有者とが無差別に混在し、しかも耕地所有については、両者のあるものが著るしく類似接近している点である。このことは次の第三表[29]において更にはつきりする。すなわちそれによると、テネシー州においては、ある一定の耕作面積を同じくする奴隷所有者と非奴隷所有者は、土地所有における富裕度に関して殆んど変りがなかつたことがわかる。

これはわれわれの今後の分析にきわめて重要な手がかりを提供する。というのは、一般に奴隷所有階級と、非奴隷所有階級の分離が土地所有のどの点において起るのか、それは生産の諸関係にどう規定されているのかという問題、いいかえると、主題にとりあげた非奴隷所有農民層（ノン・スレイヴホルダー）に関する全体的な考察

第三表

土地面積および価格(テネシー州サンプル地区1860年)

郡		耕地 (エーカー)	未耕地 (エーカー)	綜計 (エーカー)	価格 (ドル)
Johnson	奴	34	195	229	1,990
	非	34	143	177	1,133
	奴	85	177	262	2,973
	非	85	291	376※	2,893
Greene	奴	41	38	79	1,511
	非	41	64	105※	1,220
	奴	89	136	225	3,213
	非	89	146	235※	2,984
Fentress	奴	32	114	146	994
	非	32	274	306※	704
	奴	78	202	280	1,713
	非	78	202	280	1,186
Dekalb	奴	32	59	91	1,393
	非	32	79	111※	1,440※
	奴	81	202	283	3,892
	非	81	161	242	3,233
Lincoln	奴	42	48	90	2,091
	非	42	40	82	1,400
	奴	82	101	183	3,257
	非	82	64	146	3,066
Davidson	奴	33	42	75	2,436
	非	33	29	62	3,240※
	奴	84	155	239	3,863
	非	84	102	186	5,245※
Maury	奴	38	62	100	1,776
	非	38	54	92	1,392
	奴	78	76	154	3,562
	非	78	69	147	2,920
Montgomery	奴	33	68	101	1,793
	非	33	89	122※	2,507※
	奴	85	168	253	3,657
	非	85	138	223	2,132
Haywood	奴	37	81	118	1,683
	非	37	81	118	1,679
	奴	80	80	160	3,308
	非	80	134	214※	2,948
Fayette	奴	37	38	75	883
	非	37	67	104※	1,055※
	奴	85	101	186	2,380
	非	85	57	142	1,678

〔註〕 奴，は奴隷所有者。 非，は非奴隷所有者の意
※印は非奴隷所有者が奴隷所有者を上廻る場合

第二表

奴隷および耕地所有
(ミシシピー州 Bolivar county 1860年)

戸主名	奴隷 (人)	耕地 (エーカー)
G. W. Walton	26	400
I. Gayden	74	410
T. B. Lenore	46	240
C. Clark	149	1200
J. B. Flowers	0	?
T. J. Childres	14	?
G. G. Coffee	44	500
Polk & Rawls	86	1400
I. S. Robinson	0	?
F. B. Lewis	29	150
S. D. Harris	13	300
C. C. S Farrar	86	500
G. L. & R. M. Lewis	53	425
O. Kingsley	40	1000
F. A. Montgomery	0	200
J. Selleri	36	230
Livingston & Leddel	129	100
D. Bell	55	360
A. & J. A. Rawls	9	?
J. M. Owen	0	80
A. D. Luck	0	200
W. E. Starke	35	300
E. J. Girault	0	450
W. Kirk	0	60

の出発点をどう設置するかという問題が、ひそんでいるからである。第四表[21]はこの点をはつきり説明している。すなわち、テネシー州の場合、一見して明かなように、奴隷所有者の80%程

第四表

奴隷所有者，非奴隷所有者の耕地所有

（サンプル法によるテネシー州合計，1860年）

奴隷所有者

耕地面積（エーカー）	1—50	51—100	101—200	201—300	301—400	401—500	501—1,000	1,001—5,000	5,001—
%	23.78	30.41	25.18	9.94	4.40	2.01	3.66	0.59	0.02

非奴隷所有者

耕地面積（エーカー）	1—50	51—100	101—200	201—300	301—400	401—500	501—1,000	1,001—5,000	5,001—
%	65.94	25.44	7.07	0.94	0.33	0.13	0.13	0.01	

度が二〇〇エーカーまでの耕地所有者であり、非奴隷所有者の90％以上が一〇〇エーカーまでの耕地所有者であつた。したがつて、ここで大まかにいうことは、非奴隷所有者が、奴隷所有者に転化する基準線を耕地所有面積の上に求めるとすれば、五〇エーカーから一〇〇エーカーの範囲が大体それに当るということである。非奴隷所有農民（ノン・スレイヴホルダー）層分析の出発点はまづここにおかれねばならない。〔もつとも、この基準線が、いわゆる《border states》と《black belt》とでは若干の相違をみせ、後者に於ての方が、やや高いところにおかれており、地理的諸条件にしたがつて若干移動するのは当然である。事実、たとえばミシシピー州においては、テネシー州より約五〇エーカー程度高くなつている。Weaver. H., Mississippi Farmers 1850—1890, 1945 p. 81, 82. しかし、旧南部全体に関する一應の基準線として、これをみとめておいて差支えないであろう〕

ところで、われわれはたとえば第四表において、非奴隷（ノン・スレイヴ）所有農民（ヴホルダー）の耕地所有についてみたが、実のところ、それは彼等の実体を正確には表現していない。というのは、この表の基礎となつている合衆国センサスにおいては、三エーカー以下の土地、又は耕地は登録の対象とはならずに捨象

されているからである。[29] したがつて、第四表における一―五〇エーカーの欄は、正確には三―五〇エーカーと書きかえられるべきであり、三エーカー以下の土地所有者は名目的には非土地所有者として表わされねばならない。第五表[30]によれば非奴隷所有農民の30％程度が、右の規準による名目的な非土地所有者であつたことがわかる。〔いわゆる《border state》としてのテネシー州の場合を以て正確に全南部をはかることは出来ないにしても、大体非奴隷所有農民の30％近い集団がセンサスの対象にもならないような貧農達であつたことはまず間違いない。[31]〕

第五表

非奴隷所有者と非土地所有者

(サンプル方式によるテネシー州合計,1860)

郡	非奴隷所有者%	非土地所有者%
Johnson	92.49	37.14
Greene	91.20	35.55
Hawkins	84.88	45.11
Grainger	86.51	42.89
Fentress	93.32	31.45
Dekalb	84.43	34.56
Franklin	68.68	34.61
Lincoln	73.97	44.46
Montgomery	48.63	22.30
Robertson	59.05	15.04
Sumner	63.44	19.07
Wilson	57.42	20.65
Davidson	52.59	34.63
Maury	52.54	29.02
Gibson	65.25	26.69
Dyer	70.15	33.57
Haywood	46.72	20.61
Fayette	34.40	22.47
〔合計〕	67.34	30.84

こうみてくると、非奴隷所有農民層は、一方の極で奴隷所有者と競いながら、他方の最下限においては、非常な貧困農民の集団をかかえこんでいたわけで、これらの各階層が相互に重複しながら全体を形成し、その階層性においてかなり複雑な様相をしめしていたことが明かとなる。

かくて、以上の簡単な統計的、数量的観察はわれわれに以下のことをおしえる。すなわち、旧南部における非奴隷所有農民は、奴隷制との全体的な関連において分析されねばならず、そのためには、非奴隷所有農民層そのものの階層性にしたがつて、第一にその上限の部分についての、第二に、その最下限にまでおよぶ部分についての、第三に、それらの全体的な意味あいについての、検討を必要とするということである。（以下次号）

① Beard, C. A. & M. R. The Rise of American Civilization. Vol. II the Industrial Era p. 53, 54,（但し点々は筆者、ことわりなきときは以下同じ）

② マルクス＝エンゲルス選集補巻Ⅰアメリカ問題八八―八九頁、一〇一―一〇二頁

③ 長谷部文雄訳資本論第一巻第一分冊、第一版への序言

④ 「地域性」を社会構成的諸関係から問おうとする場合、そこ

からは当然各種の反奴隷主闘争や、南北戦争勃発時に広汎にみられた反戦運動の如き、反「地域」的な諸問題があわせて考えられるべきであり、それはまた重要な課題となるものであるが、この小論においては、もつぱら「地域性」の形成がどのような基盤の上でなされたかというポジティヴな側面を追求する。なお「地域性」の問題を、《Intellectual History》の立場から社会心理的にとこうとこころみたのが Osterweise, R. G., Romanticism and Nationalism in the Old South 1949 である。

⑤ Gray, L. C., History of the Agriculture in the Southern United States to 1860, 1933. Vol. I p. 302

⑥ Encyclopaedia of the Social Science, Vol. IV. McIvride, G. M., Plantation. なお南部史家フィリップスがプランテイションを「後進文明人に対する集団的継続的な最良の学校である」と書いているのはナンセンスである。Phillips, U. B, American Negro Slavery 1918 p. 343

⑦ マルクス＝エンゲルス選集補巻Ⅰアメリカ問題八五頁

⑧ Selections from the economic history of the United States 1765—1860 ed. by G. S. Callender, p. 767

⑨ マルクス＝エンゲルス選集補巻Ⅰアメリカ問題八六、八七頁

⑩ Nevins, A., Ordeal of the Union, p. 414

⑪ Helper, H. R., The Impending Crisis of the South: How to meet it, 1858 p. 298

⑫ Helper, H. R., op. cit. p. 125

⑬ Dodd, W. E., The Cotton Kingdom, 1919 p. 24

⑭ Helper, H. R., op. cit. p. 164

⑮ Hart, A. B., Slavery and Abolition p. 76

⑯ Callender G. S. ed., op. cit., p. 817 の奴隷人口分布図参照。

⑰ ここで簡単に彼等の史学上の意味あいについてのべておこう。南部史における伝統的テーゼによれば、旧南部社会は、少数のプランターと、その所有下にある多くの奴隷、および奴隷をもたざる数百万の白人、という僅か三つの階級から成り立つていたといわれている。そして、社会の支配的なファクターは当然のことながらプランター階級であつたために、たとえば Dunning の政治史にはじまる南部史研究の発展過程において、まず Phillips や Gray 等によつてプランテイションとプランターがとりあげられたのは必然の成りゆきであつた。しかし、その後の研究史の要請は、特異なファクターとしてのネグロに向けられ、黒人歴史学者の抬頭によつてネグロ奴隷又はネグロ階級に対する開拓的な研究が今世紀の三〇年代以来相ついで現れるにいたつた。たとえば Aptheker や DeBois の諸作がそれである。

一方、この現象と並行に、やはり三〇年代以来とくに顕著なものとなつたのは、南部史に関する Revisionism 又は修正派とよばれる人々の抬頭とその成果である。この修正主義の目指すところは、あくまでも従来の南部史研究に基礎を置きながら、その足らざるを補つてより正しい南部史の構成作業を完成することにある。ところが、ここに求められている正しさの意味合いと、それへの接近の可能性には可成り大きな限界がおかれている様に考えられる。というのは一般に修正主義の歴史意識は、たとえばこの派の代表的存在たる Craven の如くアメリカ史の

ヴュー・ポイントがたえず北部人によつて提出されて来たことに対する反撥 (A. Craven, The Coming of the Civil War. 1950 preface)、したがつて又、南北戦争は誤りであり漸進主義による回避が可能ではなかつたろうかというプラグマティックな疑問 (B. Devoto, Slavery and the Civil War, Harper's magazine, Feb., 1946)、更には、ターナー流のオプティミスティックなナショナリズムに対するものとして今世紀以来存在しながら、とくに三〇年代、大不況による国家の潜在能力への注目によつて刺戟をうけた Regionalism の抬頭 (Mell, M. R., Poor whites of the South. "Social Forces" Vol. 17 No. 2 Dec., 1938) 等によつてささえられており、それだけに修正主義の求める正しさの客観性を限界づけていることは否めない。

ところで最近における修正主義のうち、もつともわれわれの注目をひくのは、Owseley とその一派の研究である。彼等が従来殆んど手をつけられなかつた、数百万の非奴隷所有白人をばとりあげて、とくに統計的数量的研究を逐次完成しつつあることは賞讃されてよい。そして、従来、旧南部における慣用をうけて漠然と用いられてきた《Poor white》《Yeoman》等の概念をば捨象して、新たにこれらを包含する《Plain Folk》なる概念を導入して社会構成のより明瞭な把握への接近を意図したことは高く評価されなければならない。(F. L. Owsley, Plain Folk of the Old South. 1949) しかし、それにもかかわらず、ここで意図されていることは、非奴隷所有者が、伝統的に考えられているよりもはるかに富裕であること、いいかえるとその中産性を主張することに他ならないために、入手しうる殆んどすべての資料からひろい上げた数字は、プランテイション経済との相関関係から分離して、いわばそれ自身絶対的、静的に排列されている。したがつて、プランテイション経済における各種の収奪関係はほとんど捨象され、一見非奴隷所有者(ノン・スレイヴホルダー)の絶対的な富裕性を証するかの様に組みこまれているのである。そして、「人間の行為と歴史に対するマルクスのフォーミュラは、諸センサスや、税金リストのような記録が統計的に明かにする様に、中産階級にあてはまる余地はないであろう」という誤をおかしている。これは、修正主義の求めているものと、その限界をはつきりとうつしだしているものといえる。(Ibid, foreward ix) 以下に利用するこれら一連の統計資料は、これとは全く別個の立場で扱われねばならないことはいうまでもない。

⑱ Owsley, F. L., Plain Folk of the Old South, 1949 p. 79, 87

⑲ Owsley, F. L., op. cit. p. 11, 15

⑳ Clark, B. H., The Tennessee Yeoman 1840～1860 p. 63

㉑ Clark, B. H., op. cit. p. 57

㉒ Sluggy, R. W., Origins of class struggle in Louisiana, a sociol history of white farmers and laborers during slavery and after 1840～1875 p. 321

㉓ Clark, B. H., op. cit. p. 28

㉔ 《black belt》においては、それだけ非奴隷所有農民(ノン・スレイヴホルダー)が富裕化し、この割合も若干減少するであろうことは大体見当がつく。たとえば豊穣なジョージア州の《black belt》においては、それが大体20%程度におちている。Owsley, F. L., op. cit. p. 171

The Importance of the Appearance of Mound-Tombs (*Kofun* 古墳) in Japanese History

by

Y. Kobayashi

Archaeologically mound-tombs may represent one epoch. However, they appeared as a special type of burial, separated from the common burials, at a certain period of burial history. Those tombs were built only for the nobles. And the mound-tombs came into being later than the establishment of the nobility, i. e. after the strengthening of their authority. When the nobles came to be hereditary local rulers and no more needed to be dependant upon such a previous priestly authority as symbolized by the inherited mirror (*Denseikyo* 傳世鏡), the mound-tombs were born and accordingly the hereditary mirrors were forsaken. This tendency prevailed all over Japan side by side with the developement of the power of the Yamato Government. The generation of local mound-tombs always followed some political connection with the Yamato Government on the side of local rulers. This is proved by the fact that there were found *Dohankyo* (同笵鏡)—mirrors cast in the same mould—given from the central government to local nobles. Thus the establishment of the hereditary system of the local nobility was backed by the recognition of the central government. The fact that *Kinai* (Yamato Prevince) was the center of the distribution of *Dohankyo* would explain the political situation as a whole since the middle of the 3rd century A. D.

The Non-Slaveholders in the Old South

—— In Connection with the Second American Revolution ——

by

M. Yamamoto

The Second American Revolution, which widely opened the way for the development of American capitalism, was an enormous social war between South and North. Accordingly the study of the sectionality of both sides is an indespensable premise to fully understand the revolution.

Thus teh fact that teh Old South, a slavery, society could maintain the "solid South" much further in spite of the high tide of capitalism evokes an interesting question. In this case, it would be an important problem to annalyze the "sectionality" of the Old South in its social structure. This essay which intends to clarify the situation of the non-slaveholders quite a majority of South at the period, resulted from the considerations of those problems above.

The Politics and the Institutions of *Wu* (呉) at the *San-kuo* (三国) Period.

by

T. Miyagawa

Wu was one of those three states which were established after the collapse of the Hang Dynasty and came to be the forerunner of *Lu-ch'ao* (六朝) which was founded south of the Yang-tzū River. The points discussed in the essay are (1) the political history of this Wu to be divided into three stages, (2) its important institutions such as *féng-i-chih* (奉邑制), *shou-ping-chih* (授兵制), *k'o-fa* (科法) and the positions such as *chiao-shih*, (校事), *li* (吏), *ping* (兵), all belonging to *chung-shu* (中書), (3) the relation between the structure of bureaucracy and the imperial authority, and the promotion of *han-jên* (寒人).